弘前大学地域社会研究科 出版記念シンポジウム

SDGsを足許から考える！？
ーまち育てのススメー

弘前大学大学院地域社会研究科長
北原啓司

1. SDGsという言葉

SDGs
Sustainable Development Gorls（持続可能な開発目標）

①貧困　②飢餓　③健康と福祉
④質の高い教育　⑤ジェンダー平等
⑥安全な水とトイレ　⑦エネルギーをクリーンに
⑧働きがい・経済成長　⑨産業と技術革新の基盤
⑩人や国の不平等　⑪住み続けられるまちづくり
⑫つくる責任つかう責任　⑬気候変動
⑭海の豊かさ　⑮陸の豊かさ　⑯平和と公正
⑰パートナーシップ

しかし、この言葉が誕生する25年以上前に
ヨーロッパ（EU）では、持続可能なまちづくりを
すでに進めようとしていた

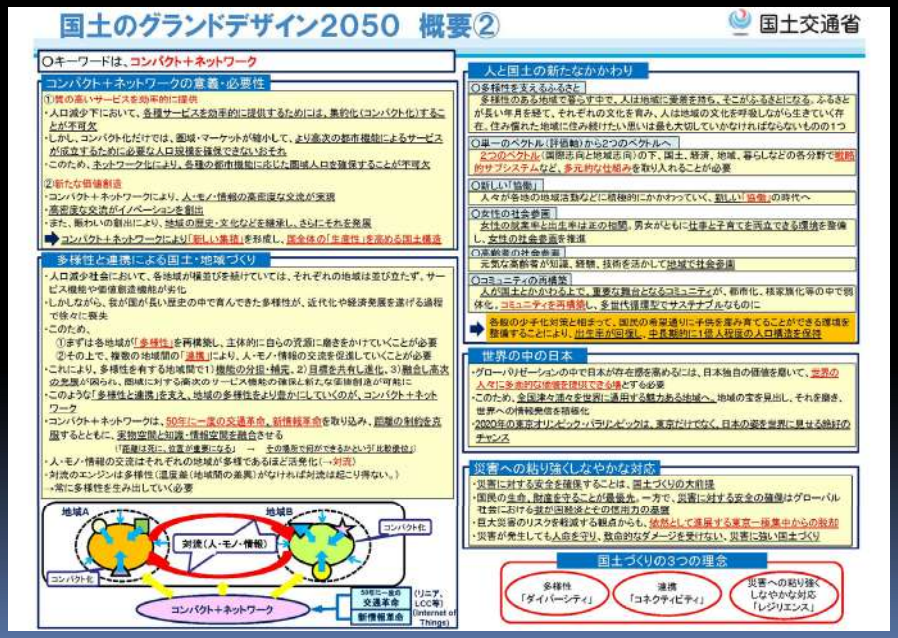
EC「都市環境に関する緑書」1990年

①都市部での環境汚染を防ぐ
②緑地での新規開発を抑える
③歴史的文化財を保全する（保存≠保全）
　明治村の帝国ホテル！？
④都市の再生、持続的な経済発展を進める

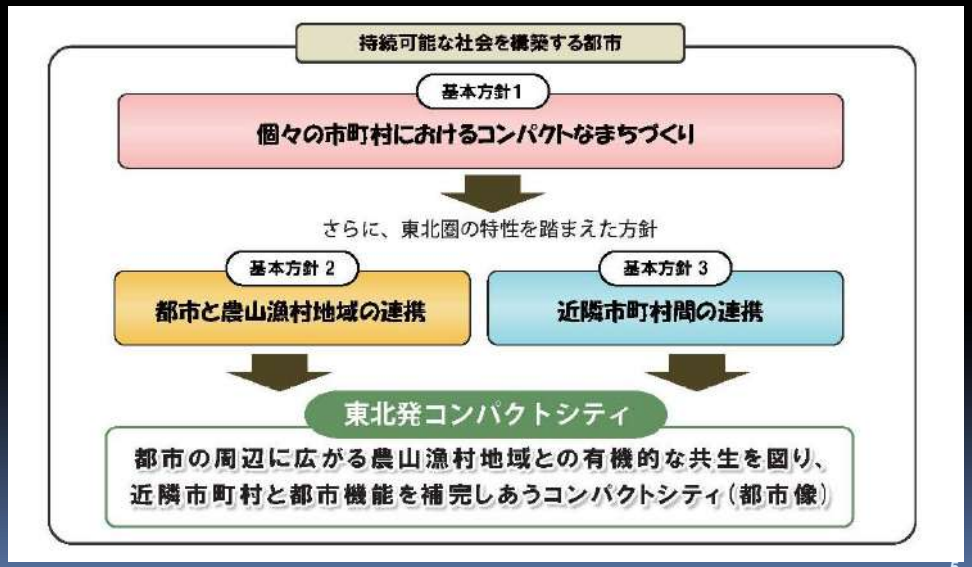
都市のぶざまな拡大の抑制、公共交通の促進
→　持続可能都市（サスティナブルシティ）

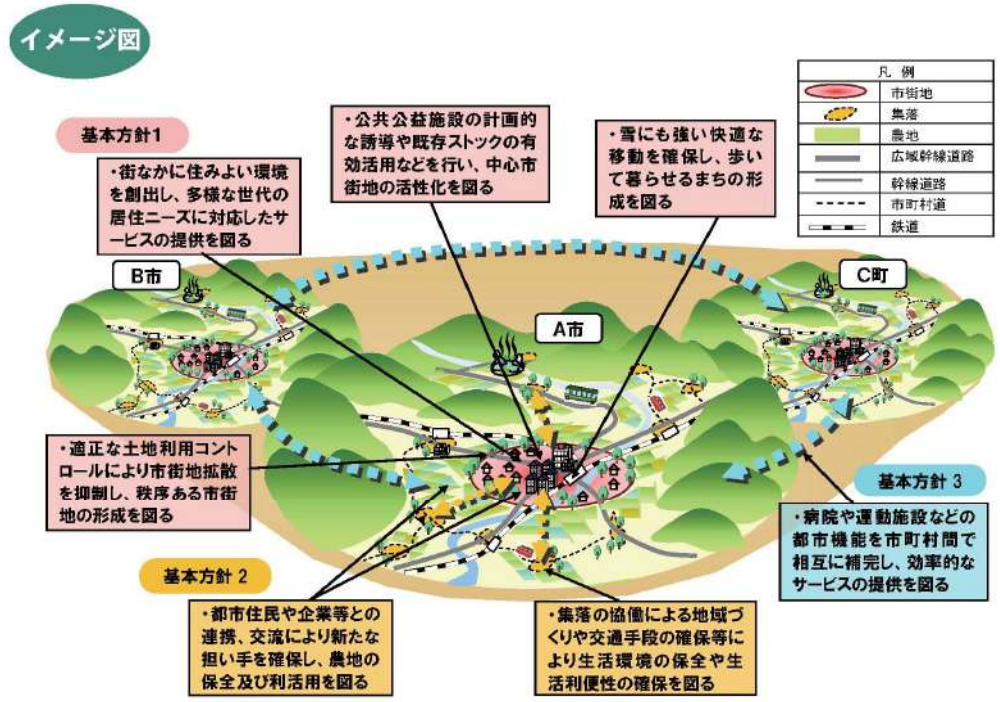
しかし私たちの目標は、都市を大きくすること
大きいことはいいことだ！　というCM
持続可能よりは、発展こそが目標
右肩上がりの時代（成長の時代）

2. コンパクト＋ネットワークという呪文

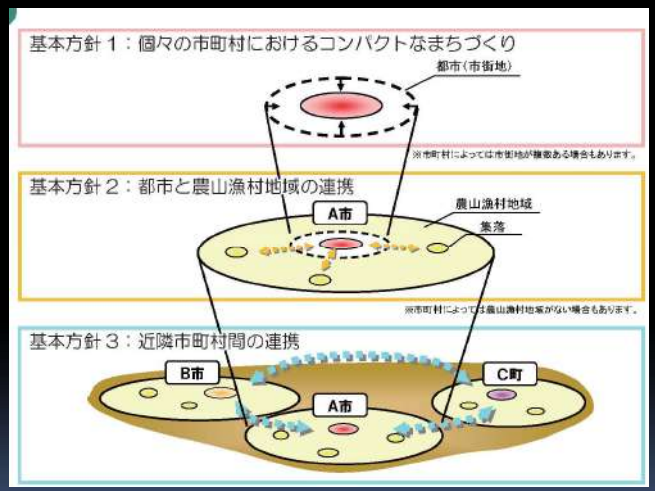


★背景には「東北発コンパクトシティ」（国土交通省東北地方整備局）





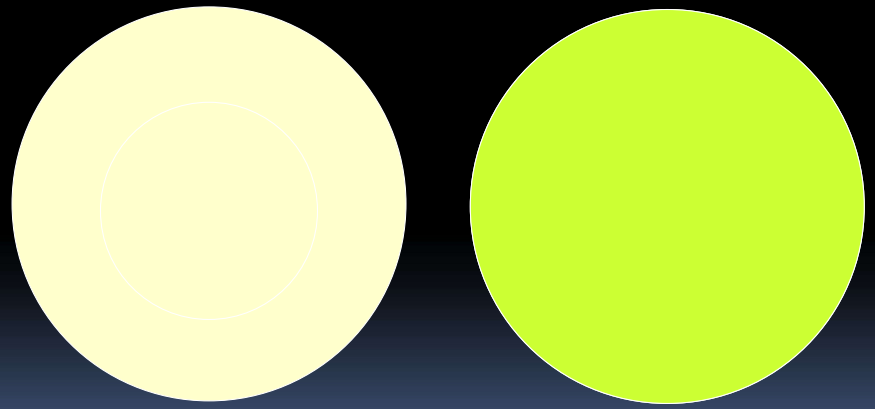
★コンパクトシティだからこそ必要な「つながり」
東北発コンパクトシティが示すネットワーク像



マクロな「つながり」とミクロな「つながり」の必要性

ただ、集約するまちをつくれば持続するわけではない！

世界の5大コンパクトシティ「富山市」でさえ・・・
（ポートランド、メルボルン、パリ、バンクーバー）



都市が縮む！？　　都市が元気になる！

★合併した都市でもコンパクト？

★これまで私たちは、

開発に都合のいいように、環境共生を目指した

Low Impact

できるだけ環境に負荷を与えない
アセスメントはtemporaryにクリアする

そして、いつのまにか、病気は進行していく
↓
「いのち」を未来につなげられるのか！？
持続可能な社会は本当に可能か

そんな状況を、大災害が襲った・・・
2011.3.11

★その日、我々は覚醒させられた

南三陸町（志津川）

ストックもフローも、一瞬にして消えてしまった

ストックの重要さを再認識する前に、消失
○そもそも、その場凌ぎの共生思想の眼にストックはどう映っていたのだろうか？
○その気があっても、諦めていたのではないだろうか？

フローを十分に活かす時間のないままに、消失
○そのフローは良好なストックになり得たのだろうか？
○時間とともに魔法が消えて、お荷物になり始めてはいなかっただろうか？

我々の東北は、これまで何度も辛い経験をしてきた

1611年（慶長三陸津波）、1896年（明治三陸津波）
1933年（昭和三陸津波）、1960年（チリ地震津波）
→ 400年に5回の大災害

〇これらの経験は、我々に何を残してきたのか
〇先達たちは教訓を残してきたのではなかったか
〇それを我々は見落とし続けてきたのではないか

たとえば、この光景を見ていただきたい

大災害の経験
我々に大きな課題を突きつける
どこに住むか、あるいはどこで生業を続けていくか
↓
短期間のうちに、その答えを見つけねばならない
↓
その苦労の成果が、現在の復興

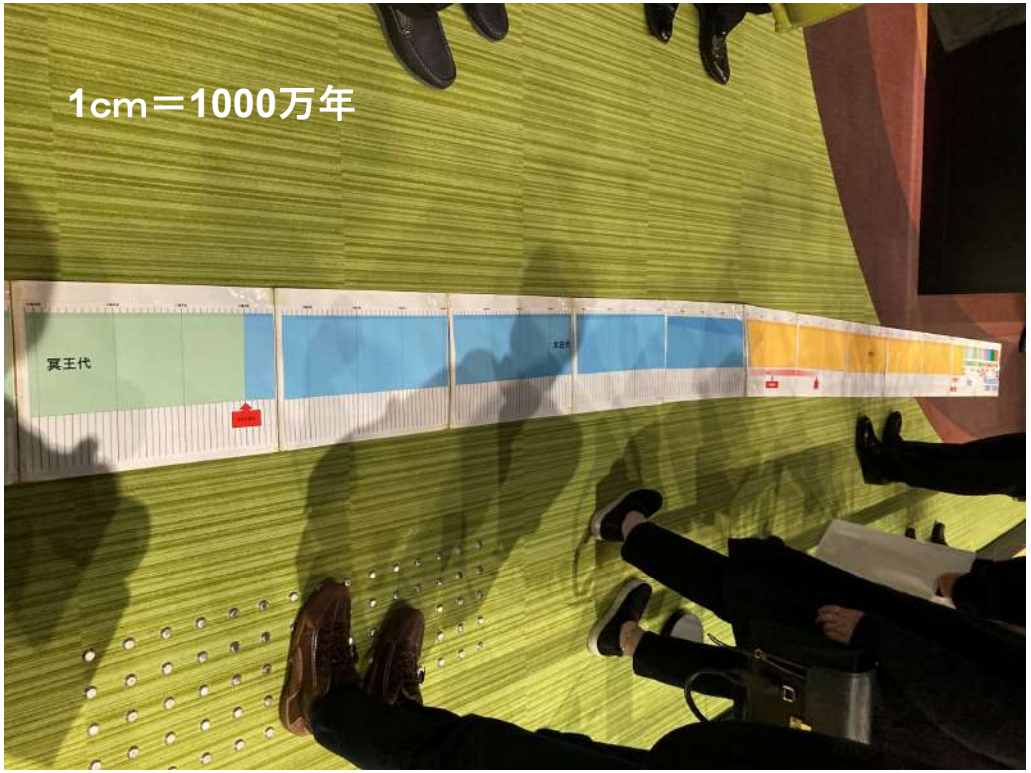
10000年を越える縄文時代は、その歴史そのもの

縄文の蝦夷国家は、安全と向き合いながら自分たちの住処を移動しながら求め続けていったのに対し、弥生の律令国家は、多少危険性があったとしても、その場所を自分たちの領域にするためにそこで生活をしていくという政治的な考え方をとっていた（丸山浩治：岩手県博物館）

縄文遺跡の貝塚跡とハザードマップは
けして重ならない

長谷川　真さん

17



こういう知恵を軽視して、開発を続けてきた・・・

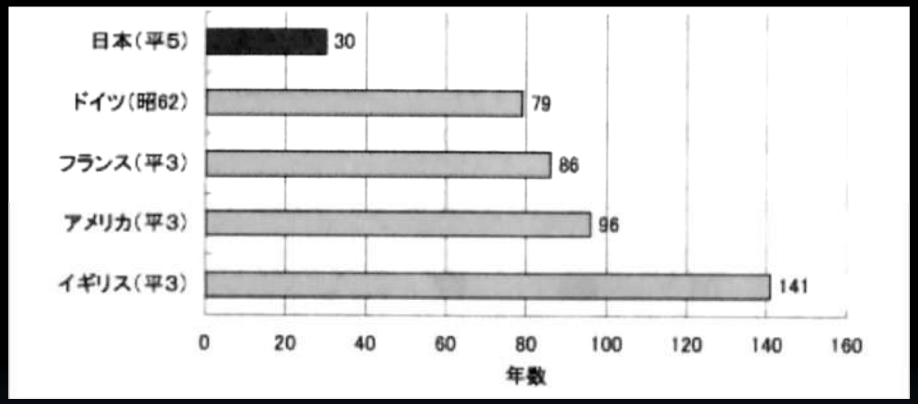
★今回の東日本大震災は、そんな発想を考え直す
大事な機会を我々に与えた

これからつくるまちは、どのように持続可能性を
実現していくべきなのか

どう復興するかではなく、復興したまちをどう持続するか
災害を受けていなかったら、どうなっていたのか
将来の持続可能性を本気で考えなかった？
そのうちに手遅れになっていったかも知れない
安全にそして元気に住み続けていくことを
本気で考えられるようになっていった東北
考えるしかなかった蝦夷社会

これまでの考え方が変わるきっかけ
ポスト復興にこそ実現できる将来の姿

3. 発想の転換期がやってきた



住宅の平均耐用年数

この日本の特徴が、これまでの我々の固定的な
考え方をそのまま表している

★本当に、日本の住宅は「ウサギ小屋」なのか

	持家面積	借家面積	全住宅	3人世帯の最低居住面積
○日本	122	45	92	39
○アメリカ	168	118	156	90
○イギリス	87	74	81	61
○フランス	101	68	86	46
○ドイツ	111	67	84	

不動産を持つことを人生の目標にすることを
全く疑うことのなかった日本人

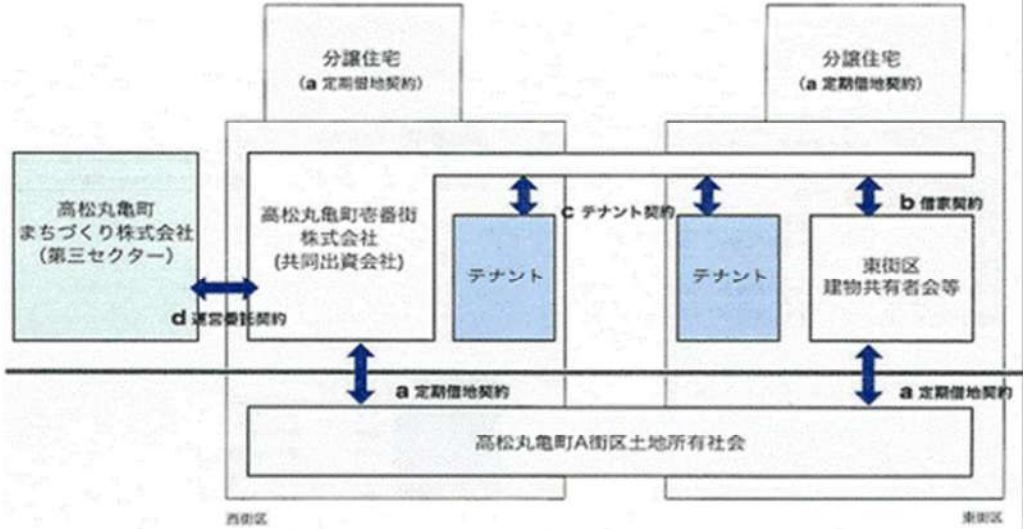
不動産を、本当は動産にしなければ
都市の中心市街地は動かなくなくなる
⇒それに気づいていた人がいた！！

★土地への執着を捨てることから始める「まち育て」
ー高松市丸亀町商店街ー

62年の定期借地権を、商店街の全ての
持ち主と設定する（オーナー変動地代家賃制）
借主は、共同出資会社、マンション所有者
権利床取得者（建物共有者会）

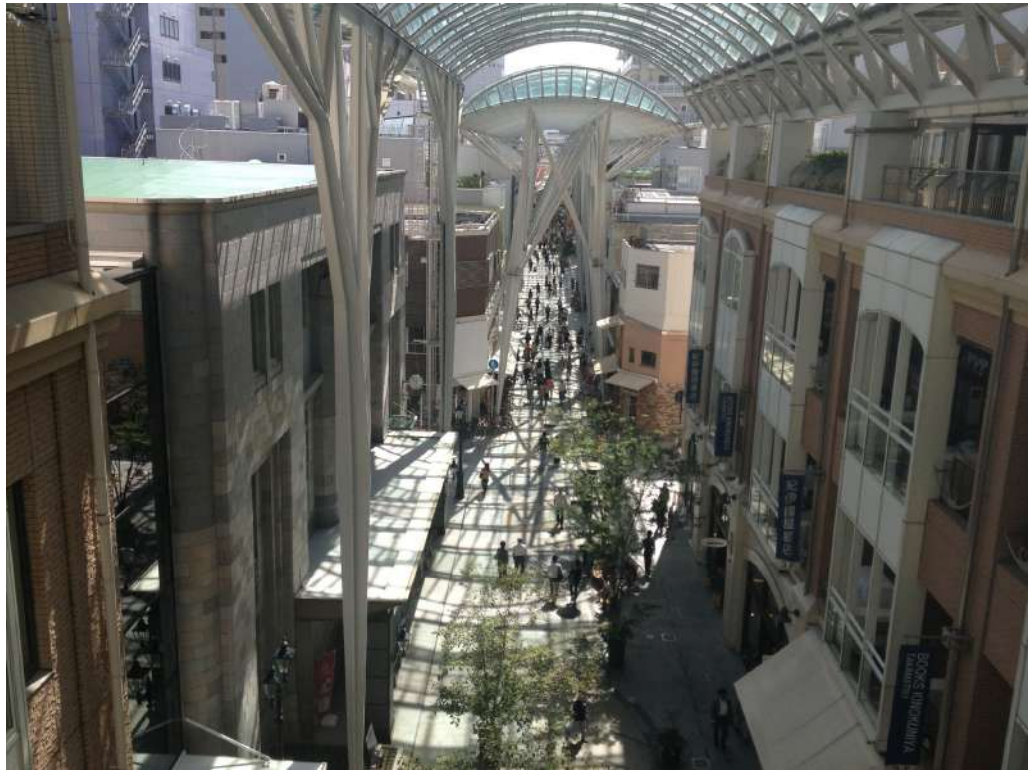
まず最初は、駐車場ビル経営
高齢者が住むならクリニックが欲しい
レストラン三國に高齢者の食事を
商店街を自転車禁止にする

[redacted]


分譲住宅
(a 定期借地契約)
分譲住宅
(a 定期借地契約)
高松丸亀町
まちづくり株式会社
(第三セクター)
高松丸亀町壱番街
株式会社
(共同出資会社)
テナント
c テナント契約
テナント
b 借家契約
東街区
建物共有者会等
d 運営委託契約
a 定期借地契約
a 定期借地契約
高松丸亀町A街区土地所有社会
西街区
東街区

GAP

TIFFANY&Co.
TIFFANY&Co.



4. 土地を持たないまちづくりは復興では当たり前

大船渡や女川でできたことは、
震災復興だからできたのか！？

①本格的なエリア・マネジメント会社の登場

②定期借地権を用いた商業店舗の再建

③まちづくり会社にお金を出す意味が
本当に理解されていくのか

HOTEL ROUTE-INN

①本格的なエリア・マネジメント会社の登場

大船渡地区津波復興拠点の全体整備方針

整備方針１　段階的な整備
・土地区画整理事業の進捗に先駆けて被災した商店や事業所等の移転先を確保するため、先行整備区域を設定し、土地区画整理事業の進捗と整合を図りながら、段階的に整備します。

整備方針２　津波復興拠点としての一体性確保
・都市施設としての一体性を確保するため、各街区を連絡する交通動線を整備します。

整備方針３　災害時の安全性の確保
・幹線道路や鉄道など広域交通機能が確保されている場所に、浸水想定区域の一時避難場所となる津波防災拠点施設を整備します。
・津波復興拠点区域内に円滑に避難できる避難経路を確保します。

整備方針４　生活支援機能の確保
・生活支援機能の確保に向けて、商業業務施設を配置するとともに、子育て支援、高齢者支援などの活動を行う津波復興拠点支援施設を整備します。

整備方針５　観光・交流機能の確保
・観光産業の振興や交流人口の拡大に向けて、宿泊施設や産直施設、イベントなど交流活動を行う広場や親水広場を整備します。

整備方針６　交通の利便性の確保
・様々な交通手段に対応した結れやすさを確保するため、JR 大船渡駅に隣接する交通広場を整備するとともに、駐車場を配置します。

整備方針７　景観核としての街並み形成
・JR 大船渡線から海側市街地の景観づくりをリードする、海や川、山並みと調和した、個性ある「みなとまち」の街並みを整備します。

整備方針８　エリアマネジメントの導入
・良好な維持管理・運営に向けて、まちを育てていくためのエリアマネジメントの仕組みを整備します。

整備にあたっての基礎的事項
●ユニバーサルデザイン
●環境共生（低炭素・省エネルギー）

特徴１．　「つくること」だけではなく「育てること」

開発（つくること）だけではなく、その後の維持管理・運営（育てること）の方法までを考えた開発を行う。つまり、育てる仕組みを持った開発を行い、持続的な取り組みの仕組みとなっていること。

特徴２．　行政主導ではなく、住民・事業主・地権者等が主体的に進めること

地域づくりにおいては、「個性豊かな地域」や「住民・事業主・地権者等に身近な地域」を実現することが重要となってきている。特に、地域の問題が多様化し、その解決方法も様々になりつつあることから、行政主導ではなく住民・事業主・地権者等の地域の担い手の主体的取り組みとすること。

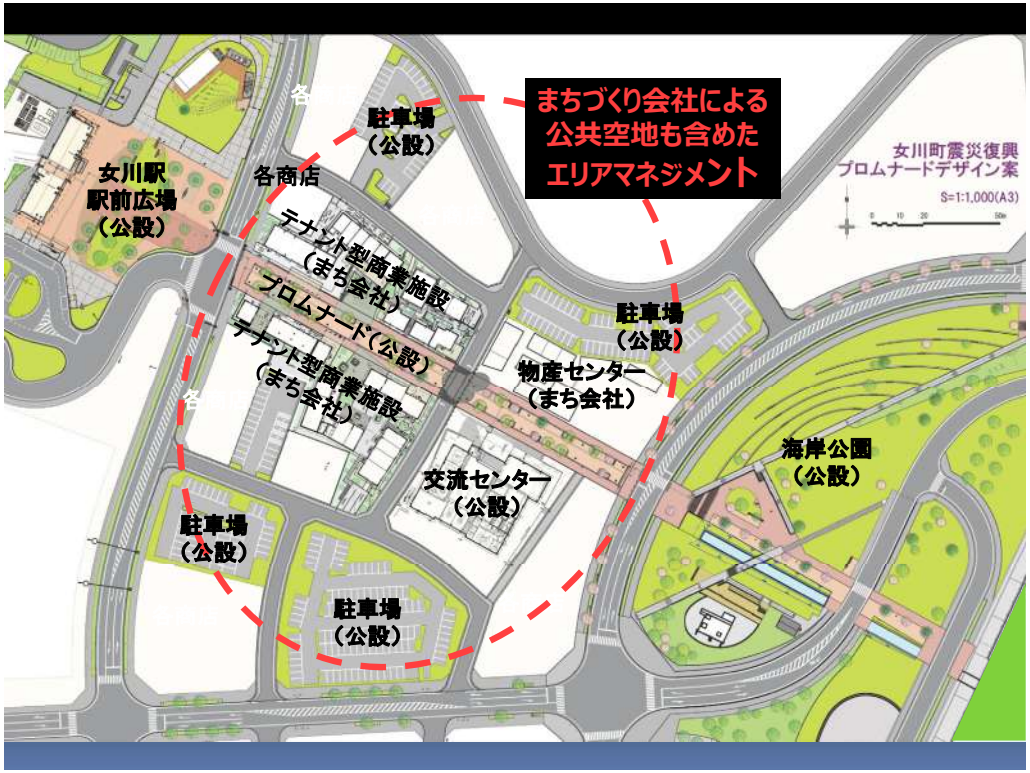
特徴３．　一定のエリアを対象にしていること

エリアマネジメントは地域の多くの住民・事業主・地権者等が関わり合いながら進めるものであるため、円滑な活動を行うため一定のエリアを対象とする。
（活動の目標や内容、活動段階や熟度といった特性に応じてエリアを設定するものとし、明確なエリアを設けない場合もある。）

★実は女川も一緒
行政：基盤整備と条件整備
民間：来訪者を増やす⇒にぎわいを生み出す⇒稼ぐ

おながわ未来創造株式会社

【出資割合】
26%：女川町商工会（筆頭）
24%：女川町
20%：一般社団法人女川町観光協会
20%：女川魚市場買受人協同組合
10%：復幸まちづくりおながわ合同会社



2016 初日の出

②定期借地権を用いた商業店舗の再建

災害危険区域

住むことができない　→　土地の価値が下落

とは言え、中心市街地に存在

住むことはできなくても、活性化させたい

↓

エリアマネジメントの真骨頂

賃貸「空間」を、元気な「場所」に変えていく

災害とは無縁な地方都市の衰退した市街地

残っているために、ドラスティックな変化が

期待できない

→それでも、丸亀町は挑戦した

③まちづくり会社にお金を出す意味が

本当に理解されていくのか

組織の会費を払うのではなく、事業展開に投資する

人々の組織という発想が成立するか

キャッセンは、なんとか工夫して説得

所有時の<u>固定資産税相当の支出</u>

地代＋会社への出資

会社へお金を出さなければ地代が上がる

この工夫こそが、マネジメントの発想

manage to :なんとかする、どうにかする

★ここで、ちょっと古い資料をご覧下さい
（黒石を研究する娘が弘前図書館で見つけました）

大正時代の津軽の「おおやけ」は
こんなことを話していました

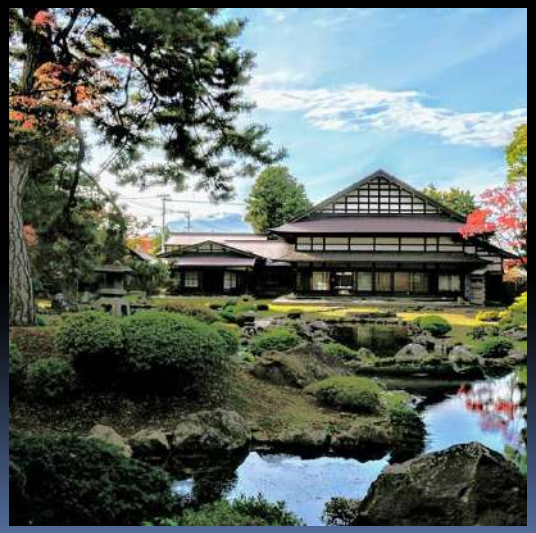
これこそが、真の

コンパクトシティ

烏城志（大正2年、安西如鳩編）

修理と保護

加藤宇兵衛



金平庭園

烏城志（大正2年、安西如鳩編）

修理と保護

加藤宇兵衛

黒石の発展ということは、単に町が広く大きくなるということでなくして、それには充実という意味も含めて居るだろうと思う。外に拡がるというのみでなく、内に充つるということもなくてはならぬ。勿論、虚飾的発展でなく、堅実的繁栄でなくてはならぬ。黒石の町は現在の町は現在の儘で。アレ以上大きくならぬともよい。但より一層町民の活力を充たしたいものである。

私は瑞西（スイス）の国を観たことがないが、烏城の地をして、話に聞いて居る瑞西のようにしたい。黒石は日本の瑞西であると言わしめたい。すなわち彼の風景明媚なる上に、水清く物産の饒き（おおき）を利用して工業を盛んならしめ、大いに富の増殖を図るのである。それぞれの事業を興す、それぞれの物産を殖やす、甚だ結構である。それと同時にまた黒石の内部の修理をやらねばならぬ。

黒石の人は、入るを量って出るを節し、何もかも着々と黒石町を修理し、キチンと小締（こぢんまり）した、何等の不足のない町にしたい。

無論それは一時にできない。突飛に施設するものでもない。順序を立てて次第を逐うてやるのである。要するに黒石町民の相談の結果、町是を定めてそれに向かって進んでいくのである。恰も彼の祭礼のように、この山車を作ろう、彼の行列にしようと言って、盛んなるものができあがったように、協同一致して永遠無窮に伝わる施設をしたいのである。到底一人一個の力で成るものでないから、皆がその意気込みにならねばならぬ。

山車を担ぐにも、綱を引くにも、皆が力を入れねばならぬ。また鉄棒を引くにせよ、囃をかけるにもせよ、調子が揃わなくてはならぬと同じことで、心を併せ力を協わせなくてはならぬ。

★黒石の「おおやけ」の思想を
現代のまちづくり（立地適正化計画）に活かす！

○賢くない成長を続けてきた各自治体が
成長の時代から成熟の時代にシフト
していく中で、どのような考え方で、
自分たちの地域の将来像を描いていくか！

○誰かに適正な区域だと判断してもらうのではなく
この区域で地域の人々が生活していくことを、
自信を持って正しいと言える都市計画

○現実を正確に市民に伝えた上で、それでも
その地域に住み続けたいと考える市民と
一緒に計画を進めていく覚悟の時！

5. ポスト復興から持続可能なまち育てへ

まさに東日本大震災被災地こそ覚悟のできたまち
覚悟をしなければ、前に向かって進めなかった

災害を受けていないところは、
まだ覚悟ができていないだけ

南海・東南海地震のシミュレーション
とは言え、そこまでの危険性を意識できない
成長を目指した都市計画をただ続けていくだけ

我々の経験を、いかにこれからの都市計画に
活かすべきなのか

覚悟があるから、将来を味わう権利がある
→これからの持続可能性を考えるまち育て

今こそ、持続可能性を足許から考える時

黒石の「おおやけ」の言葉
人口減少時代の地方自治体の誇りと気概を
穏やかに表現した、コンパクトシティ哲学
すでにその言葉の中には
黒石ならではのSDGsの考え方があった

『SDGsを足許から考えかたちにする』
弘前大学大学院地域社会研究科の仲間たちが、
それぞれの視点からSDGsを表現してくれている
どのような論述が展開されるか、期待をしながら、
読んでいきたい。